昭和戦前期における岸田日出刀の「建築計画」の講義方針とその理論的特質

－講義原稿「建築計画総論」（昭和12年）と東京帝国大学工学部講義要目の分析を中心として－

THE LECTURE POLICY AND ITS THEORETICAL CHARACTERS OF HIDETO KISHIDA'S
“KENCHIKU KEIKAKU” CLASS IN SHOWA PREWAR PERIOD－ Based on analysis of the lecture manuscripts “Introduction to the architectural design” (1937)
and the syllabus on the engineering department of the Tokyo imperial university －

勝原基貴*, 大川三雄**

Motoki KATSUHARA and Mitsuo OHKAWA

This paper discussed on the lecture policy and its theoretical characters of Hideto Kishida's "Kenchiku Keikaku" class at the Tokyo imperial university, based on analysis of the lecture manuscripts "Introduction to the architectural design" (1937) and the syllabus. Kishida considered the field as a subject to "designing architecture" in building up his two classes of "Kenchiku Keikaku" and "Isho and Soshoku (design and decoration)." He held lectures attached with history, design and planning while developing what he had succeeded from Yasushi Tsukamoto. With the assistance of such catchphrases as "Architecture is a container of human life" and "Necessity is the sole mistress of art" by Otto Wagner, Kishida established a theory to position architecture as a form of art. He also repeatedly explained about the meaning of Locality (specialty) throughout the lecture, in which he introduced a historical view in his attempt to back up the theory of dwelling development.

Keywords: *Architectural Design, Education of Architecture, Hideto Kishida, History and Theory of Architecture, Utility, Locality*

建築計画, 建築教育, 岸田日出刀, 歴史意匠, 実用性, ローカリティ

1. はじめに

岸田日出刀（1899-1966）は、大正12年に東京帝国大学に任官してから昭和34年に退官するまで、長きに渡り、建築意匠の学問的な確立を目指した学者として研究・教育活動を行った。周知の通り、研究室からは前川國男、丹下健三ら、その後の日本建築界を牽引した建築家を多数輩出し、大学教官の職分のみならず、早くから執筆活動も活発に行い、生涯を通じて、設計活動にも取り組んだ。また、建築設計競技の審査員、日本建築学会会長などの要職によって、昭和初期から戦後の再建にかけて、日本における建築のモダニズムを背後から戦略的に展開していった人物として知られている¹⁾。

筆者はこれまで、日本の近代建築の展開に少なからぬ影響を与えた岸田の建築理念とその展開の具体的な解明を目指し、岸田にとって重要な活動でありながらも、あまり検討されてこなかった教育活動に着目してきた。前稿²⁾では、金沢工業大学が所蔵する岸田の講義原稿「意匠及装飾（形体篇）」（昭和12年）を対象に内容の分析を行い、同時期に設計された墓碑・銅像台座の作品と設計競技での発言と併せて、昭和初期における岸田の建築造形理念について考察した。本稿も、こうした岸田の建築教育とその背景にある理論を考察する研究の一環であり、東京帝国大学工学部で行われた講義「建築計画（第一・第二）」³⁾の為に昭和12年に書かれた講義原稿「建築計画総論」（以下、講義原稿）を取り上げる。

昭和戦前期の東京帝国大学工学部は、昭和初年に塚本靖、伊東忠太、関野貞、佐野利器が退職したことにより、残る内田祥三を中心に建築教育の再編が行われた時期にあたる。岸田は、大正14年6月に助教授、昭和4年4月に工学博士の学位を授かり、同年6月の教授就任後の東京帝国大学では、「建築計画」、「意匠及装飾」、「橋梁美学」といった講義や演習の科目を担当した⁴⁾。通年としては、昭和5年から昭和34年の退官まで「建築計画」を講義し、戦後の新制カリキュラムからは、担当に吉武泰水と平山嵩が加わっている。昭和12年に執筆された講義原稿には、概括的で一般的な建築の基礎知識を伝える内容だけでなく、建築教育における本講義の位置付けや岸田の建築計画に関する種々の見解が示されている。昭和戦前期における岸田の思考を検討する上でも、最適の資料の一つと言える。

そこで本稿では、まず、講義原稿「建築計画総論」（昭和12年）の目次構成から講義の全体像を読み取り、叙述内容の分析を通して、講義方針とその理論的背景を明らかにする。つぎに、本講義は、塚本靖から引き継いだ科目であるため、東京帝国大学工学部講義要目に載る授業計画を用いて、大正期に「建築計画」の講座を担当していた塚本の講義項目と比較し、前任との関連を検討する。最後に、講義原稿から導き出した岸田の講義方針の理論的特質について、当時の東京帝国大学工学部の建築教育の状況や岸田が講義の参考書として示した建築計画の技術書との関連を踏まえて整理し、考察する。

* 日本大学大学院理工学研究科 大学院生・工修

** 日本大学理工学部建築学科 教授・工博

Graduate Student, Graduate School of Science & Technology, Nihon University, M. Eng.
Prof., College of Science & Technology, Nihon University, Dr. Eng.

2. 講義原稿「建築計画総論」(昭和 12 年)の内容分析

2-1 資料の概要

金沢工業大学が所蔵する岸田日出刀関連資料⁵⁾には、岸田が記した講義原稿とノート類が 17 点(表 3) がある。「建築計画」と表題が記された史料は 3 冊(⑦、⑧、⑨⁶⁾) あり、うち 2 冊(⑦、⑧) は、陸軍経理学校の講義用に記されたものである。陸軍経理学校用の 1 冊(⑧) には、表紙に「昭和 15 年」とある。しかし、いずれ(⑦、⑧) も内容が断片的で、かつ「昭和 12 年」の年記が認められる 1 冊(⑨) の内容を活版印刷した状態の頁が含まれているため、本稿が扱う、昭和 12 年の手書きの講義原稿(⑨) が原本と判断できる。

講義原稿「建築計画総論」(昭和 12 年) は、手書きの講義原稿 A4 版罫線紙 127 枚と図版資料 7 枚から成り、講義原稿「意匠及装飾」と同様に、2 穴のバインダーファイルに綴じられている。罫線紙は縦長のもので、インクペンで横書きに記述されている。〈建築計画概論〉に続き、〈建築計画通論〉、〈住居建築計画〉の 3 章から構成される。全体の目次構成を表 1 に示す。文中に「住宅、学校、病院 etc.等の各種建築計画の各論に入るに先ち」と記されていることから、第 3 章の〈住居建築計画〉の後ろに、学校建築、病院建築等に関する内容が続いていた可能性も考えられる。なお、年号が確認できないため同時に作成されたものかは不明だが、「工場建築」と題されたノートがあり、この他にも「事務所建築」、「ホテル建築」、「図書館建築」、「病院建築」といった建築種別ごとの図面、写真資料を集成したファイルがある。

本稿では、岸田の担当科目であった「建築計画」の講義方針とその特質を明らかにすることを目的としているため、住宅の通史的内容が中心となる 3 章目以降は、目次構成の把握にとどめ、叙述内容の分析対象から外した。次項より、〈建築計画概論〉と〈建築計画通論〉の内容を順に検討したい。

表 1 講義原稿「建築計画総論」の目次構成

建築計画総論	頁数
- 建築とは何かということ	1-5
- 建築計画の建築基礎学科としての位置	5-6
建築計画通論	
I 自然(環境)と建築との間の密接なる関係	7-10
II 中に容れる人間の生活をよく考えること	10
III 建築の目的要求を正しく視ること	12
IV 経済的思考	12-13
V 現代日本の建築家としての自覚	14-15
VI 建築計画講義の方針	15
VII 参考書	16-17
住居建築計画 第一 住宅建築	
- 住宅建築	1
- 西洋における住宅建築の変遷	
(1) 埃及の住宅建築	1-4
(2) 西方アジアの住宅建築	5-6
(3) 古代Greece、Rome時代の住宅	6-14
古代に於ける北欧の住家	15-16
(4) 欧州中世の住居建築	17-24
(5) 文芸復興時代住居	24-26
(6) 十九世紀の住宅建築	26-33
- 日本住宅史講	
(1) 先史時代	1-3
(2) 原始時代	4-8
(3) 飛鳥奈良時代	8-12
(4) 平安時代	13-21
(5) 中世(鎌倉、室町時代)	21-34
(6) 桃山江戸時代	35-64
- 満洲の住居建築	65-75

2-2 叙述内容の分析

・建築計画概論

〈建築計画概論〉では、まず初めに《建築とは何かということ》と題し、「建築の本質を明らかにする手段」、「建築が芸術か否か」の 2 点に触れている。次に《建築計画の建築基礎学科としての位置》と題して、「建築計画」が研究対象とするものと建築の研究分野における、その位置付けについて説明している。

- 建築とは何かということ

まず、岸田は「建築の本質を明らかにする手段」について言及している。「建築が何かということは説明を要さぬ程 simple のものと考えられるが、深く詮索し出すと仲々にむずかしいもの。『宛も芸術とは何か』にひとしい。建築の本質? 芸術の本質は何かに付いては古くから多くの人が論じたが何れも『観』の程度を出でず、確然として定義の如きはなし。この問題がはつきり解決できぬ理由の一つは『美』の本質が明かでないから。美の本体が明かにされれば芸術の本質も又建築の本質も比較的容易に解明されよう」と述べ、古くから多くの人が論じながらも建築の本質に確然とした定義がない理由に、「美」の本質をめぐる問題がはつきり解決できない点を指摘する。そこで、岸田は「古来建築に就いての定義や解釈は種々あるが、最も容易と考へられるは『建築は人間生活の容器』との定義。一応この定義を正しいと肯定すれば、人間生活というものが明らかにされれば建築も自ら明らかになる筈」と説く。「建築は人間生活の容器」との定義を活用し、人間生活を解明することが建築の理解につながると考えた。

そして、考究すべき人間生活には、「物質的・精神的の二つの方面がある」と述べ、「一方の満足では不完全な生活である」と言い、「建築はこれら二つの方面をよく満足する様に計画されなければならぬ」と主張する。このような解釈をもって大正中頃に盛んに議論された建築芸術論・非芸術論を振り返れば、「トルストイの芸術論を楯にとり、建築には人間の感情移入はできぬと論じた建築非芸術論者」の見方は「余りに表面的な見方」であると批判する。

続いて、建築が芸術か否かについて言及している。「建築のある部分、例えば構造学方面、設備の方面には純科学的な数学的な点もあるが、平面計画、意匠装飾上の計画上にありては、これは全く個々の建築家により別々につくられ表現される」と述べ、また、「ある目的要求をもつ建築を計画する場合それを担当する建築家の異なるに応じて造られる建築にも夫々差が起る。決して数学を解くように或一つの解答丈けには終わらない。建築のあらゆる問題を機能的に研究して於けば遂には一つの数学公式の如き解答がえられるに至らんと考える向きもあるが、事實は然らず」と言い、構造・設備では数学的部分もあるが、平面計画・意匠装飾上の計画においては、個々の建築家により造られ、表現されるものであることを理由に、「建築は一つの立派な芸術である」と主張する。また、目的要求をもつ点において、絵画や彫刻等と違う芸術であり、「似たものとしては工藝がある」と説明している。

- 建築計画の建築基礎学科としての位置

「英語の Design という語の通訳はない。計画と普通いうが、全体をよく言い表はしてはいない」と前置きを入れた上で、建築の研究分野には、「歴史的方面、美的方面(意匠装飾)、数理的方面(構造)、材料的方面、都市計画的方面、社会学的方面」がある中で、建

建築計画は「専ら建築の計画 (Design) 方面を研究するもの」と説明している。建築の計画は「平面計画、設備計画、形体意匠計画、等」に分かれると述べ、「建築計画」の講義では専ら前二者を対象とし、第三者は「意匠及装飾」の講義に譲ると述べている。また、建築計画を分けて以下の2つとし、「Mechanical Designは専ら Engineering 的の立場から、建築の合理性、能率、利便、快適性等の問題を研究解決せんとするもの。即ち建築の実用性を研究するもの。Artistic Design は主として形体及色彩方面」と説明する。

「Artistic Design ー建築の求める人間の精神的方面の満足。

Mechanical Design ー人間生活の物質的方面の満足。実用性。

「これら二面は、個々に独立して分けて考えられもするが、骨肉の関係の如く、同時に考えなければならない密接な関係にある」と述べている。

・建築計画通論

＜建築計画通論＞は11頁におよび、建築物の種別に関わらず、「あらゆる建築の種類に応用されるような一般的の法則」として、「Ⅰ. 自然 (環境) と建築との間の密接な関係」、「Ⅱ. 中に容れる人間の生活をよく考えること」、「Ⅲ. 建築の目的要求を正しく視ること」、「Ⅳ. 経済的思考」、「Ⅴ. 現代日本の建築家としての自覚」の5つを挙げ、最後に講義の方針と参考書を提示している。

Ⅰ. 自然(環境)と建築との間の密接な関係

「あらゆる気象上の条件、一気湿、気温、経度 (太陽光線の方向、角度、強さ) 風雪雨雲、地震 etc. 一が直接間接土地々々の人の生活に影響を及ぼし、建築の形式、内容を規定する」ことを、寒暖による床形式の差異や雨量による屋根形状の差異が生じる事例をあげて説明している。次いで、「今日の進んだ技術からすれば、窓のない建築も充分実現の可能性がある。即ち照明は人口光線により、温度、湿度、気流の調和は機械的な方法による (artificial light と air conditioning) 然しこの如きは単にできると云うだけのことで経済上其他多くの点で非常な無理を伴うもの」と述べ、「建築はそれが建てるべき土地の自然的条件に飽迄支配され、かかる条件によく順応するのが建築の正しい道」であることを示し、経済的合理性も考慮すべきとしている。

Ⅱ. 中に容れる人間の生活をよく考えること

「住宅でもその中に住まう人により生活方も趣味も好みもちがう。性別により職業によりても。かかる中での生活の差に応じ建築も当然異なる」とし、「建築は其中に住まう人のためのもので、概念的な流行語などに災かれて自然と人に合わないような建築をつくるのは建築家の大きな罪悪となる。建築のための建築に終つてはならぬ」、「自然と人の差により世界各国に国相応の差というものは当然生まれる」と述べ、海外の事例をそのまま模倣しても成功しないことを伝え、「Ⅰ. 自然 (環境) と建築との間の密接な関係」と併せて、自然と人の差異により生ずる「建築における Locality」を考慮することの重要性を主張している。

Ⅲ. 建築の目的要求を正しく視ること

冒頭で「我に建築家に与へられる課題は建築種別に著しく多い。それら各種の建築のもつ目的要求をより見定めて、それを満足する様な方法手段を建築技術的に見出そうというのが建築計画の目標である。故に各種建築物の目的要求を正しく視ることが重要となる」と述べ、建築物の目的・要求の見極め、満足する様な手段や方法を

見出すことが「建築計画」の目標であることを示している。

オットー・ワグナーの「芸術を支配するものは必要だけである。

(Artis sola domina necessitas)」との言を持ち出し、「この necessitas (必要: 実用) を正しく視ることがまず第一に重要である。」と述べ、建築の目的・要求を見極めることの重要性を説く。さらに、「過去の建築をみるに、建築は実用性の満足ということのために他の一般芸術 - 絵画、彫刻 - と競争する上に大きな重荷、handicap を負わされてきたかの観がある」、「建築はその実用性がある故に以て他の絵画や彫刻の上に君臨することができる」といい、実用性の追求が芸術分野における建築の優位性につながると考えている。

Ⅳ. 経済的思考

「材料の適正の使用。地方材料 (Local material) の利用、市場品の適用。(market material) 経済的で合理的な構法、意匠装飾上の簡単化」を通して、「Least work で最も maximum Efficiency を求めること」といい、利殖としての利益の追求ではないが、現代の建築家には、最小限で最大の効果を生むことが求められていると述べている。

Ⅴ. 現代日本の建築家としての自覚

ⅠからⅣと重複するが、再び「自然と人の差異ということをよく認識すること」と述べ、「日本には日本の自然と人の生活によく合致する建築がなければならぬ」と主張している。

《Ⅵ. 建築計画講義の方針》として、「各種建築に従ひ、まずその沿革の概要を述べ、然る后語建築に特殊の計画的要求を述べる。講義の内容は現代を標準すること勿論なるも、過去に於ける発達状況を識ることは是非共必要。現代いくも過去からのつながりに外ならず、過去をすることは間接に現在を識ることの助けになる」と、講義の方針を述べている。最後に、海外の建築系雑誌と『高等建築学』、『建築工学ポケットブック』の2冊を参考書⁷⁾として紹介している。

図1 表紙の見返し部分に記されたメモ書き

3. 東京帝国大学工学部講義要目にみる「建築計画」

3-1 東京帝国大学工学部講義要目について

ここでは、東京帝国大学工学部講義要目 (以下、講義要目) を用いて、岸田の担当した「建築計画」の講義内容と前任者である塚本靖の講義内容を比較することにより、前任との関連を検討したい。講義要目は、毎年教員が提出した授業計画を元に編纂され、一般学生が修学の参考とするために配布されたものである。工学部全般の

講義が「講義」と「実験製図及演習」に大別され、科目名、担当教官名、単位数、実施される時限、授業計画が掲載されている。

3-2 前任・塚本靖の「建築計画」と岸田の講義の変化

岸田は、大正末の洋行⁹⁾の際にシカゴにあるスウィフト社の屠殺場を訪れている。その様子を記した日記に「塚本先生の建築計画のご講義の時にも、一寸此處の話を拝聴してをるし、異常な興味をもって出かける」⁹⁾と感想を残していることから、岸田が塚本の「建築計画」を受講していたこと、塚本の講義でスウィフト社のユニオン・ストックヤードが取り上げられていたことがわかる。

講義要目の大正13年度版に載る塚本の「建築計画」の授業計画をみると、第一章の通論に続き、第二章から九章にかけて、建築種別を8種に大別し、さらに細かく32種の建築物を取り上げている。岸田が正式に教授として担当する昭和5年以降¹⁰⁾の講義要目には、前章で分析した講義原稿の中にある「建築計画通論」の章がないが、少なくとも昭和14年まで掲載内容に変化がない。

岸田の昭和5年の講義要目と塚本の大正13年の内容を比較すると、既に、第二章の住居建築、第四章の工業建築、第六章の体育建築といった建築種別の捉え方に違いが見られる。第二章の住居建築では、岸田の講義から「邸宅」と「宮殿」がなくなり、「旅館」は「ほてる」に改められている。塚本が第八章で「公共建築等」として取り上げていた「工場、倉庫、屠場」は、岸田の講義では、第四章に独立した章を設けている。第六章の「体育建築」、第八章の「交通建築」については、塚本の講義にはなかった章目である。

住居建築から邸宅や宮殿の項目がなくなることには、岸田が通論の《IV. 経済的思考》で述べていた「裕福なパトロンを背景として金殿玉楼のみ造り得た時代」とは違い、「経済的思考が必要な時代」との認識が反映されていると言えよう。また、全体として建築種別の章目が、塚本の場合、公的な性格をおびた建築物が多いのに対し、岸田の建築種別では「営業建築」が「商業建築」に改められ、事務所の項目が増え、「工業建築」が「公共建築等」から独立して章立て

されていることから、公的な建築物だけでなく、民間の建築活動にも触れられている。

岸田は、昭和14年まで同じ授業計画を掲載しているが、住宅史の内容や通論の項目が、戦後の授業計画に表れていることから、塚本の講義形態に前述のような変化を加えながら受け継ぎ、さらに表2のような講義内容に改編していったと考えられる。戦後は、吉武泰水と平山嵩が加わり、授業計画の項目にも変化が見られる。建築家に求められる素養を示した基礎的な内容(通論)を岸田が担当し、平山が建築環境に関する内容を、吉武が各種建築物の平面計画に関する内容を担っている。実際に行われた講義内容と授業計画の項目の違いはあるだろうが、少なくとも戦前の昭和14年までは、変更箇所を反映させずに授業計画を提出していることから、講義内容の改編は、岸田の意向によるものと考えられる。

4. 岸田による「建築計画」の講義方針とその特質

・講義の方針:精神的方面(美)と物質的方面(実用)

通論から「建築計画」の最終的な目標が、「建築の目的・要求の見極め、その目的・要求が満足する様な手段や方法を見出すこと」であったことがわかる。「意匠及装飾」が「建築の求める人間の精神的方面の満足」を扱い、「建築計画」は「人間生活の物質的方面の満足」を研究するものであった。両講義の研究対象とするところの領域を整理すると図3のようになる。

概論の冒頭で述べていたように、岸田は「建築は人間生活の容器」という定義を利用し、人間生活を考究することが、建築の本質の解明につながると考えた。そして、人間生活を物質的な方面と精神的な方面の二面に分けて、これらを建築における実用性(物質的な方面の満足)と美(精神的方面の満足)に結び付けた。そして、人間生活が両者を過不足なく要求する様に、建築においても骨肉の関係の如く、これら両面を全的に捉えなくてはならないと論じた。講義としては、別々の単限であったが、“建築を計画(Design)する”

表2 東京帝国大学工学部講義要目にみる「建築計画」講座の授業計画

担当教官	塚本靖	岸田日出刀						岸田日出刀	吉武泰水	平山崇	岸田日出刀	吉武泰水
講座名	建築計画(第一、第二)	建築計画(第一、第二)						建築計画第一	建築計画第二	建築計画第三	建築計画(第一)	建築計画(第二)
年度	大正13年	昭和5年	昭和6年	昭和8年	昭和13年	昭和14年	昭和27年					
授業計画	第一章 建築計画概論 第二章 住居建築 一、邸宅 二、宮殿 三、都市住宅 四、共同住宅 五、別荘等 六、旅館 第三章 社交、娯楽建築 七、喫茶店 八、俱樂部 一〇、公設俱樂部 一一、公浴場 一二、劇場等 第四章 教化建築 一三、学校 一四、図書館 一五、博物館 一六、博覧会 第五章 療養、慈善建築 一七、病院 一八、養老院 一九、孤児院等 第六章 官衛、公署建築 二〇、議院 二一、市庁 二二、公会堂 二三、裁判所 二四、刑務所等 第七章 営業建築 二五、銀行 二六、取引所 二七、手形交換所等 第八章 公共建築等 二八、市場 二九、屠場 三〇、倉庫 三一、工場 三二、停車場等 第九章 宗教建築	第一章 建築計画概論 第二章 住居建築 一、住宅 2. 共同住宅 3. ほてる 第三章 商業建築 4. 商店 5. 百貨店 6. 銀行 7. 市場 第四章 工業建築 9. 倉庫 10. 工場 11. 屠場 第五章 教化建築 12. 学校 13. 図書館 14. 博物館 15. 美術館 第六章 体育建築 16. 各種運動用建築 第七章 社交娯楽建築 17. 料理店 18. 倶楽部 19. 映画館 20. 劇場 第八章 交通建築 21. 停車場 22. 航空機発着場 第九章 官衛公署建築 23. 議事堂 24. 市庁舎 25. 公会堂 26. 裁判所 27. 刑務所 第十章 療養建築 28. 病院 29. 公衆浴場 第十一章 宗教建築						1. 建築計画通論 2. 住宅、アパートメント ホテル 3. 商店、百貨店、事務所 4. その他各種建築設計 計画の概要		第一章 建築気候 1. 気候 2. 温の感覚 3. 室内調温 4. 室内気候 5. 建物と外気の熱交換 6. 自然換気 7. 機械換気 8. 温水、蒸気、輻射暖房 第二章 建築音響 9. 聴覚と言語 10. 騒音 11. 遮音 12. 建築音響 第三章 日照、畫光照明 13. 日照 14. 畫光照明 第四章 日照 第五章 衛生施設 15. 便所、浄化槽 16. 衛生器具、設備	I. 建築計画概論 II. 西洋住宅史 III. 日本住宅史 IV. 住宅計画及設計	I. 各種建築の設計計画 1. 学校 2. 図書館 3. 劇場、映画館 4. 病院 5. その他 II. 平面計画概論 1. 平面計画 2. 規模計画

ための学問として、一体のものとして捉えていたことがわかる。

・芸術への意識: 建築を芸術の範疇に位置づける論理

このような科目の捉え方に至った背景には、東京帝国大学における建築教育の再考を行った内田祥三の影響も考えられるが、建築衛生(計画原論)や建築材料、都市計画の講座開設を力説していた内田の建築教育像¹¹⁾を考慮すると、むしろ岸田が概論で述べていた「建築は一つの立派な芸術である」との主張を自らが担当する講座で示す狙いがあったと考えられる。

岸田は、建築を芸術の一分野とみなしていた。「ある目的要求をもつ建築を計画する場合それを担当する建築家の異なるに応じて造られる建築にも夫々差が起る。」と述べ、そして、オットー・ワグナーが『現代建築』の中で残した「芸術を支配するものは必要だけである」との一文にある「必要(necessitas)」を「実用」と解釈し、標語の言い換えを行った。つまり、換言すると「芸術を支配するものは実用だけである」という意味で捉えた。建築には実用性を満足しなければならない点があり、この点が他の芸術分野と比べて、不利な状況をつくり出していると考えていた岸田にとって、ワグナーの言葉は、暗闇を照らす一筋の光のように思えたに違いない。しかし、これだけでは建築が単なるブラティカルな存在になってしまう。そこで、担当する建築家が異なるに応じて、建築作品にも差が出ることを述べ、「建築計画」(実用性)と「意匠及装飾」(美)が一体である関係性を概論で説明することにより、「建築が芸術である」と捉えることができるだけでなく、絵画や彫刻といった他の芸術に対して、建築が優位的な立場に立てると唱えたのである。

このように岸田は、実用性の存在を根拠に、他の芸術分野に対する優位性を語っている。建築が芸術ではなく科学だという工学技術に偏重した意識が台頭していた当時の状況¹²⁾を振り返れば、優劣を論じまですても、優越感を与えさせ、建築を芸術という範疇に位置づけようとする意図があったと考えられる。

図2 岸田が示す当時の建築の研究分野

図3 「建築計画」と「意匠及装飾」の講義内容とその位置づけ

・ローカリティー(特殊性)の説明: 歴史的視点の導入

表紙の見返し部分にメモ書き(図1)がある。「材料、構造、配置、法規、各種建築、設備、通風採光、造形意匠(形、色)・仕上げ材量、防災、歴史」とあり、設計計画上の要件が箇条書きしている。冒頭の「構造」は、二重線で訂正され、「材料」と書き換えている。「構

造」を構造体となる材料の違い程度にしか捉えていないことがわかる。技術的視点が希薄であることは、「意匠及装飾」の講義原稿の叙述にも表れていた¹³⁾が、ここにも構造技術的な側面を軽視している建築観が表れている。最後の「歴史」にはアンダーラインが引かれ、その重要性を強調している。他教科にそれぞれを専門とする教員がいる中で、自らが担う「建築計画」の講義方針を模索した痕跡と考えられる。

具体的な講義内容は、各建築種別に求められる平面計画上の要件に関する解説や西洋、日本、満州における住宅建築の史的考察の稿へと進んでいく。そのような講義方針の特徴を求めれば、建築種別ごとの平面計画の概説だけでなく、住宅史の叙述によって、住宅の発展を理論的に後付けしようとした点にある。住宅史は、西洋と日本を分けて記述し、最後に満州事情案内所が出版した『満州国の習俗』の「住居」の章を要約した「満州住居建築」を附している。(表1)岸田は、通論で繰り返し、自然と人の差異により生ずる特殊性について触れ、建築におけるローカリティーの重要性を主張している。住宅史の叙述を展開していく「住居建築計画」の章の冒頭で、岸田は、「生活の全般を最もよく表出するのは住居建築である。原始時代に於いてまず穴を掘り、天幕を張りめぐらし、或いは樹上に住まひしよく文化進むと共に次第に建築らしい住居建築の発達をみるに至る。過去に於いて住居建築は如何に変化し来つたか」と述べ、「西洋に於ける住宅建築の変遷」を書き出している。西洋と日本の人間生活の容器である住宅の発展過程とその相違を示すことにより、日本の特質を伝え、西欧モデルの模倣が日本では適切でないこと、自然と人の差異により生ずる特殊性の意味を強調する狙いがあったと考えられる。

岸田は、「建築計画」の参考書として、『高等建築学』と『建築工学ポケットブック』をあげているが、いずれも建築種別ごとに必要とされる要件を紹介する技術書であり、歴史的な視点から住居建築を解説したものではなかった。

5. おわりに

ここまで、講義原稿と講義要目を対象に、岸田が担当した講義「建築計画」の講義方針とその理論的特質について考察してきた。

岸田は、「計画」を“Planning”ではなく“Design”の和訳として捉え、“建築を計画(Design)する”ための学問として、自らが担当していた「建築計画」、「意匠及装飾」の講義を体系立て、塚本靖から形式的に引き継いだ講義項目を改編させながら、歴史、意匠、計画という性格を兼ね備えた内容の講義を展開していた。

「建築計画」は、実用性を研究するもので、その最終的な目標は、「建築の目的・要求の見極め、その目的・要求が満足する様な手段や方法を見出すこと」であり、「意匠及装飾」は、精神的方面の満足を研究するものであった。物質的方面と精神的方面の両面の密接な関係を主張こそしていたが、これら両科目の結びつきに関する具体的な手段への言及はなかった。通論で岸田が示した5つの法則のように、その主張は、建築家としての素養を求めた内容であった。

概論と通論の各章では、「建築は人間生活の容器」やオットー・ワグナーの「芸術を支配するものは必要だけである」といった言葉を援用し、建築を芸術の範疇に位置づける論理を組み立て、また、全体を通して、ローカリティー(特殊性)の意味を繰り返し説明して

いた。建築を芸術の一分野とみなす立場をとる講義原稿の内容は、戦前の講義要目に載る授業計画には表れていない。ローカリティーの説明では、西欧モデルの模倣が日本では適切でないこと、日本の風土の特異性と建築との関係を示すために、日本建築を再検討し、建築計画の講義ながら歴史的な視点を導入していた。このような「建築計画」での住宅史の叙述は、岸田が提示した参考書や塚本の講義にもなかった側面である。

ローカリティーを重要視する姿勢は、前稿¹⁴⁾で取り上げた「意匠及装飾」の講義内容にも認められ、岸田の建築デザイン教育に共通する点である。岸田の思考するローカリティーの概念の意味やその基本的構造の解明には、歴史叙述の手法など、他資料との更なる検証が必要である。また、社会的な背景とも重ねた考察が求められるが、岸田の思考を考える上で、重要な問題を含んでいる。今後の検討課題としたい。

謝辞

本稿の執筆にあたり、金沢工業大学所蔵の岸田日出刀資料の閲覧では、佐藤康二氏に大変お世話になりました。厚く御礼申し上げます。

参考文献

- 1) 岸田日出刀：otto・ワグナー 岩波書店 1927
- 2) 満洲事情案内所編：満洲国の習俗 1935
- 3) 東京帝国大学：学術大観 工学部・航空研究所 1942
- 4) 「岸田日出刀」編集委員会編：岸田日出刀 相模書房 1972
- 5) 岸田日出刀：薨 相模書房 1937
- 6) 日本建築学会編：近代日本建築学発達史 丸善 1972
- 7) 藤岡洋保：「科学」から「方法」へ、建築ジャーナル、1995. 2
- 8) 高階秀爾ほか：ル・コルビュジエと日本 鹿島出版会 1999
- 9) 吉武泰水：建築計画学の創成、株式会社建築家会館、1999
- 10) 藤森照信：佐野利器論、材料・生産の近代 東京大学出版会 2005
- 11) 岡本和彦、伊藤俊介、長澤泰：建築地理学 新しい建築計画の試み 東京大学出版会 2007
- 12) 梅宮弘光：岸田日出刀のカメラアイー1930年における「構成」の位相、東京都庭園美術館：建築の記憶-写真と建築の近現代 2008
- 13) 「吉武泰水山脈の人々」編集委員会編：吉武泰水山脈の人々 建築計画の研究・実践の歩み 鹿島出版会 2011
- 14) otto・ヴァーグナー、樋口清 佐久間博訳：近代建築、中央公論美術出版 2012

注

- 注1) 岸田の略歴については、磯崎新、二川幸夫「特集：世界から見た日本の現代建築① 日本建築の価値を決めたモノ」(『GA JAPAN』、2009年9月、p.p.12-45)、五十嵐太郎「岸田日出刀：丹下健三を世に送り出した男」(『建築文化』、2000年1月、p.p.150-151)の記述のほか、全般的な業績については参考文献4ならびに『建築雑誌』に掲載の追悼文を参考にした。岸田に関する論考では、藤岡洋保が、日本建築界における戦前のル・コルビュジエの受容に関する論文で、岸田のル・コルビュジエに対する評価について言及している(参考文献8)ほか、佐々木宏が、「ル・コルビュジエと日本の建築家たち」(参考文献8)や『巨匠への憧憬 -ル・コルビュジエに魅せられた日本の建築家たち』(相模書房、2000年)の中で、いち早くル・コルビュジエに可能性を感じ、論評で取り上げ、日本の建築家に新しい方向性を示唆した点を評価している。梅宮弘光は、岸田が手掛けた2冊の写真集を取り上げ、岸田の「構成」の位相について詳しく考察している(参考文献12)。また、建築作品や業績について個別に論じたものに、早川典子「岸田日出刀設計「永積邸」について～建築系博物館における建築資料研究～」(日本建築学会大会学術講演梗概集(北海道)、2004年)、梅干野成央、土本俊和「百瀬家文書中の檜ヶ岳殺生ヒュッテとヒュッテ西岳に関する昭和初期の

建築史料」(日本建築学会大会学術講演梗概集、2012年)がある。

- 注2) 拙稿「講義原稿「意匠及装飾(形体篇)」(昭和12年)にみる岸田日出刀の建築造形理念 -昭和初期の墓碑・銅像台座の作品と忠霊塔の造形意匠に対する言説に敷衍して-」(日本建築学会計画系論文集、2013年12月)
- 注3) 『近代建築学発達史』(丸善、1972年)に載る東京帝国大学での学科目「建築計画」の歴史的な過程をみると、明治22年に設置された「特別家屋配置法」まで遡ることができる。明治30年に「特別建築意匠」に名称を変え、その後、明治27年から始まる「住家」(その後、明治30年に「住家意匠」に改称)と合流し、明治34年から「建築意匠」になり、大正8年から「建築計画」となっている。大正8年には、「意匠及装飾」の前身にあたる「意匠・装飾」が始まっている。「建築計画」は、建築学科修学規定上の必修科目であり、昭和12年の段階における在学者には、第3学年に立原道造、薬師寺厚、第2学年に大江宏、丹下健三、浜口隆一、第3学年に生田勉、吉武泰水らがいた。
- 注4) 岸田は、大正11年3月に東京帝国大学工学部建築学科を卒業し、同月より大講堂建設実行部に技師嘱託として勤務する。翌年2月から、建築学第一講座の講師を務め、大正14年6月に助教授、昭和4年6月に教授に就く。急速な昇進の背景には、昭和初年に塚本靖、伊東忠太、関野貞が定年で退官、佐野利器が退職し、残る内田祥三が後継者の育成の責任をとならなければならなかった事情(参考文献6)や、大学院に進学し、将来を嘱望されていた建築史家・長谷川輝雄が急逝したことがある。岸田は昭和戦前の時期に、東京帝国大学のほか、陸軍経理学校(昭和7年より)、日本大学で教鞭を執った。
- 注5) 講義原稿は、金沢工業大学所蔵の岸田日出刀資料の中から見出したもので、ノート類を合わせると計17冊が確認できた。(表3)

表3 講義原稿とノート類一覧(金沢工業大学所蔵)

	資料名称	作成年 (括弧内は推定)	形態	頁数	
				記述	図版
1	朝鮮建築史		大学ノート	97	15
2	支那建築論		大学ノート	77	0
3	支那建築史(Ⅱ)		大学ノート	47	0
4	COLOR(Ⅰ)	(昭和2年頃)	大学ノート	100	2
5	COLOR(Ⅱ)		大学ノート	69	0
6	意匠及装飾	(昭和3年)	大学ノート	51	3
7	建築計画		ファイル	25	8
8	建築計画(陸経講義)	昭和15年	大学ノート	42	2
9	建築計画総論	昭和12年	ファイル	127	7
10	江戸時代(二)明治以降		大学ノート	41	4
11	日本建築史(第一巻)	(昭和3年)	スケッチブック	267	0
12	意匠及装飾(形体篇)	昭和12年	ファイル	70	4
13	Bridge Architecture		大学ノート	25	0
14	Russian Architecture	昭和2年	大学ノート	35	0
15	鎌倉時代 藤原時代	(昭和3年)	大学ノート	59	2
16	建築家ト其作品	(昭和8年頃)	大学ノート	13	0
17	工場建築	昭和13年	ファイル	75	28

※ 冒頭の番号は説明のため付記した。括弧内の年号は、叙述内容と挟み込まれていた手紙等から推定した。

- 注6) 丸内の番号は、表3に附した番号に対応している。

- 注7) 「建築計画」の参考書として、以下の文献名をあげている。

(邦書)	高等建築学 建築工学ポケットブック
(洋書)	各種建築種別にもよるが、雑誌を主とする
(England)	Architect and Building News
(America)	Architectural Record Architectural Forum
(France)	Architectural D'aujourd'hui
(Germany)	Der Baumeister Baukunst und Städtebau (Wasmuths) Innendekoration

- 注8) 大正末に図書館建設の為の視察の名目で、大正14年12月から大正15年11月まで約11か月間にわたり欧米各地をめぐった。岸田の海外渡航の詳細については、拙稿「大正末の海外渡航での岸田日出刀の主な訪問都市について」(日本建築学会大会学術講演梗概集、2013年)で明らかにした。

- 注9) 岸田日出刀「古日記から」(参考文献5)に載る大正15(1926)年1月8日の日記に、見学時の状況を記している。

- 注10) 岸田は、昭和4年6月11日に教授となり、建築学第2講座担当となる。その為、通年を教授として担当したのは、昭和5年度以降である。

- 注11) 参考文献6の中で、関野克は、当時の講座と教授陣について、「内田

〔祥三〕は第二の辰野となり、絶大な指導力を発揮して、建築学の新鮮な分野を開拓し、従前の講義に再考を行なった。かくして昭和5年、第2講座に岸田日出刀、昭和8年7月、第5講座に藤島亥治郎を新任し、昭和10年4月、第3講座に武藤清を当て、第4講座は内田の兼任とした。内田は建築衛生（計画原論）・建築材料・都市計画の3つの講座の開設の必要を力説していたが、講座の新設はきわめて困難であったので、昭和14年建築学第4講座を建築原論に転換し、建築材料と都市計画はこれを一本とて、都市防火を内容とする建築学第6講座の新設を行なった。」（〔 〕括弧内は筆者）と述べている。

注12) 1915（大正4）年、佐野利器の「家屋耐震構造論」（正式には「家屋耐震構造要梗」）と野田俊彦の「建築非芸術論」が発表される。（『建築雑誌』に載る「建築非芸術論」は、野田の卒業論文の一部で、佐野利器と共に指導教官であった内田祥三の推薦により掲載されている。）野田

は、岸田が講義原稿で述べていたように、トルストイの言葉を引用して、「実用品としての建築」を主張し、建築の美と建築の表現性を全面的に否定する。当時の大学と学会を中心に、このような建築が芸術でなく科学だという工学技術に偏重した考え方に共感する者も多かった。根強かった芸術軽視の傾向への反発も一因となって、建築的芸術表現を突出させた分離派建築会が結成される。内田は、歴史様式を使う設計手法を全面否定する分離派の動きに、概して否定的であったと言われている。（参考文献10、参考文献7）

注13) 「意匠及装飾」の講義原稿に書かれているモダニズムの解説について、拙稿（注2）で考察した。簡単性と明快性を専ら「簡明」という形の問題として捉えており、技術的手段に対する視点が希薄であった。

注14) 前掲書（注2）

（2013年12月28日原稿受理、2014年4月21日採用決定）